

## 【エッセイ】

# 小山田浩子、「穴」再訪： 文学を読むとはどういう活動か？

森 本 奈 理

Hiroko Oyamada's "Ana" Revisited:  
What Kind of Activity Is Reading Literary Works?

MORIMOTO, Nari

キーワード: 文学、文化翻訳、小山田浩子、ポール・ド・マン、エドワード・サイード

### 1. はじめに

文学作品を読むこととは「(他者との) 対話」である。自分の部屋で孤独に作品と向き合う場合でも、作品を通して向こう側にいる作者と対峙することになるし、そもそも、作品がすぐれたものであれば、そこには登場人物の多種多様な「声」が記録されている。

そして、そうした他者の異質性をどうにかして同化・吸収できないものかと格闘する。人間とは元来、自分の体内に異物を取り込むことを拒絶する生物なので、こうした作業は実現不可能なことを達成しようとする無謀な試みですらある。要するに、「文学作品を読む」こととは予め敗北を義務づけられた挑戦である。こうした「文学を読むことの不可能性」について述べた一節を、「読むこと」の哲学者ポール・ド・マンから引用しておきたい。

For all of them, the encounter with the language of literature involves a mental activity which, however problematical, is at least to a point governed by this language only. All strive for a considerable degree of generality, going so far that they can be said to be writing, not about particular works or authors, but about literature as such. Nevertheless, their generality remains grounded in the initial act of reading. (106-07)

批評家全てにとって、文学言語との遭遇は頭の体操を必要とする。その体操とはいかに困難なことであれ、少なくともある程度、現在遭遇している言語によって規定される。批評家は皆かなりの一般化を狙うので、深入りした挙句、個々の作品や作家ではなく、文学自体を批評していると評価されることもある。にもかかわらず、依然、そうした一般化は個々の作品を読むという当初の行為に基礎を置いているのである。

ここでド・マンが言っているのは、すぐれた批評家が文学作品と対峙する際、それを完全に客観的な視点から読むことはできない、ということである。批評が批評である以上、それは個々の文学作品を離れて、文学一般という普遍を扱わなければならない。それと同時に、批評は目の前にある作品の特殊性も十分に考慮する必要がある。普遍と特殊の「境界線」を綱渡りすること。それが文学者の責務であり、文学を読むことの醍醐味でもある。

文学作品を読むことは、(批評家個人のレベルでは) これほどまでに「熱い」作業である。そして、これまでの私は孤独に文学作品を消費し論文を書いていればよかったので、こうした醍醐味について真剣に考えることはなかった。文学の面白さなどあまりにも自明のことで、それについてわざわざ考える必要性はどこにもなかったのだ。ところが、現在の私は(運の

良いことに) 文学部の教員として、授業で多数の学生に文学を教えなければいけなくなった。

もちろん、文学の授業で為すべきことは明確である。文学を読むことの「熱さ」、他者との対話の面白さを伝えればいだけである。学生時代の私は、作品について好き勝手な発言ができ、他の学生の解釈を知ることができる「文学の授業」が大好きだった。大げさに言えば、そうした様々な意見をすり合わせる「文学の授業」こそ、民主主義のあるべき姿だと思っていた。しかし、いざ自分が「文学の授業」をやってみると、これがなかなか難しい。私自身の評価では、自分は学生に文学を読むことの「熱さ」をうまく伝えられていない。さらに悪いことに、授業中、目の前にいる学生と対話・討論もできていない。

「文学の授業」がうまくいかないことの原因は多々考えられる。私がこれまで文学を教えたことがなかったという経験不足、そもそも学生がそんなに文学を好んでおらず、特に対話も望んでいないこと等々。だが、一番大きな原因は私に勇気が欠けていることである。<sup>1</sup>「複雑なものを複雑なままに」提示する勇気が。要するに、教師としての私は、分かり易さを追求するあまり、本来分かりにくいものである文学を過度に単純化して伝えるきらいがあるのだ。文学作品は登場人物の「声」が多数蠢いていてこそそのものなのだが、私はそうしたものの一つを恣意的に選び出し、それ以外の「声」を抑圧してしまうのだ。そのことから来る罪悪感に私はいつも悩まされている。

そして、情けなくもありがたいことに、私に救いの手を差し伸べてくれたのは文学好きの学生だった。私は昨年度の秋学期に「文学と宗教」という学部共通科目を担当し、戦後の日本文学を社会背景とからめて読んでいった。この授業を受講していた学生が何人かの有志とともに「読書会」をやりたいと言ってくれたのだ。もちろん、私は快諾した。文学の授業で「ありのままの文学」を提示する勇気がまだない私にとって、これは学生と「文学できる」唯一にして絶好の機会である。

この「読書会」の第1回は2014年4月30日に、日本語日本文学科の二年生三人とともに行われた。初回のテキストは小山田浩子の「穴」であった。この作品について、私は文教大学文学部英米語英米文学科が発行している『英語英文学』第41号に、「『文学と宗教』補講：小山田浩子、『穴』を読む」というエッセイを書いた。それを書いたのが2014年3月上旬の二日間だったので、約二ヶ月の時を経て、再びこの作品を読むことになった。そして、学生の解釈に大いに刺激を受け、やはり文学は対話・討論なくして成り立たないことを痛感した。以下は具体的な作品を通じて、そのことを確認する作業である。

## II. 文学作品を「非」政治的に（ありのままに）読む

この節のタイトル「文学作品を『非』政治的に（ありのままに）読む」は、ほとんどの人にとって、言わずもがなのことを言っている。だが、私の研究するアメリカ文学の世界では、これは当たり前のことではなく、むしろ、文学を政治的に読まなければ研究者として食べていくことはほぼ不可能である。こう言ったからといって、私は「文学の政治性」に注目するイデオロギー批評を非難しているわけではない。実社会での経験を積むにつれて、政治的な意見を持つことは大学教員としての責務だと感じるようになってきた。さもなければ、私が現在教えている学生や将来教えるはずの子どもたちに対して、あまりにも無責任な態度を取ることになる。

わざわざこのような断り書きをしたのは、『英語英文学』に載せたエッセイが「穴」の政治的な解釈だったからである。<sup>2</sup>この雑誌は英米語英米文学科の学生全員に配布するので、私としては、いかにも「文学研究」といった論文ではなく、学生が読んで役に立つことを紹介したかったのだ。「穴」の冒頭には、正社員と非正規労働者の社会的断絶についての記述があるのだが、私はこの部分を全体に敷衍して、「この小説は文学が労働と切り結ぶ（複雑な）関係を取り扱っている」と結論づけた(34)。要するに、人はあまりに「文学」的になりすぎると社会から完全に離脱してしまうの

で、ある程度、「労働」という社会からの要請を受け入れなければならない、ということである。

この結論は先に引用したド・マンの主張を、異なる文脈に置き換えただけである。ド・マンの主張は批評家と文学作品の関係についてのものだったが、それを批評家と社会の関係に読み換えてみよう。そうすると、エドワード・サイードの *Representations of the Intellectual* にある「知識人」という概念に行き当たる。

This is far from an easy task: the intellectual always stand between loneliness and alignment. How difficult it was during the recent Gulf War against Iraq to remind citizens that the U.S. was not an innocent or disinterested power (the invasions of Vietnam and Panama were conveniently forgotten by policy-makers), nor was it appointed by anyone except itself as the world's policeman. But this was, I believe, the intellectuals' task at the time, to unearth the forgotten, to make connections that were denied, to cite alternative courses of action that could have avoided war and its attendant goal of human destruction. (22)

これは決して簡単な作業ではない。知識人は常に孤独と迎合の中間に存在する。最近行われた対イラクの湾岸戦争時、以下のことを市民に理解させるのがいかに難しかったことか！ それは、アメリカという超大国が清廉潔白でもなく公平無私でもない、ということだ。（政治家はヴェトナムやパナマへの侵略を都合よく忘れていた。）また、アメリカが世界の警察だと認めている国はアメリカだけだ、ということだ。だが、忘れられたことを蒸し返し、否定された共謀関係を暴き、戦争とそれに付随する大量殺戮を避けうる別の選択肢を示すことこそ、知識人がその際に負うべき責務だったのである。

サイドによれば、「知識人」とは世を捨てて孤独に生きる人でも、社会のメインストリーム（大きな「流れ」）に迎合する人でもない。その両者を分ける境界線上に立ち、社会に対して言わなければいけないことをきちんと口にできるのが「知識人」なのである。

このように、『英語英文学』で示した私の解釈は、「穴」の主人公松浦あさひをサイド的「知識人」として読むものであった。そして、こうした読みの妥当性を担保していたのが、作者小山田が高学歴の主婦であり、前作「工場」で非正規雇用の辛さを訴えていたことである。さらには、かくいう私もつい先ごろまで非正規労働に甘んじるしかなかった身分だったので、小山田のこうした嘆きにはすんなりと共鳴できたからである。

だが、今回、読書会に出席した学生には、作者自身に関する背景知識も非正規労働に苦しんだ経験もなかったので、当然、彼女たちの読みは私のとは異なっていた。彼女たちの読みは「格差の再生産」という社会問題ではなく、あさひと「松浦さん」の嫁姑関係に注目するものであった。だが、この学生の読みを紹介する前に、ここで扱う「穴」のあらすじをおさらいしておこう。

「穴」の主人公松浦あさひは非正規で働いていたが、夫の転勤を機に退職し、専業主婦になる。彼女らは夫の実家の隣に住むが、夫の両親はワーカホリックで、昼間自宅にいるのはあさひと九十才近い義祖父だけである。ある日、姑の依頼でコンビニエンスストアまでお使いに出かけたあさひは、道中で謎の「黒い動物」に遭遇する。彼女があとをつけると、それが掘ったと思しき穴があり、そこに落ちてしまう。この事件をきっかけに、あさひは「亡霊」を見ることができるようになり、夫の兄だと主張する人物と知り合う。この「兄」は一家の異端児で、あくせく働く両親に反抗し、社会から「引きこもる」ことを選んだという。彼は「子どもを育てるために働いてお金を稼ぐ」という世の中の大きな「流れ」に異を唱える。そして、ある夜、義祖父が出奔するのだが、彼を追いかけたあさひは再び「穴」に

落ちる。それ以降、あさひが「兄」を見かけることはなくなり、彼女も松浦家の大きな「流れ」に従って、コンビニエンスストアでアルバイトを始める。

以上がこの小説のあらすじなのだが、このまとめからして、私は学生の影響を大に受けている。というのは、「穴」に二回落ちることに意味があると教えてくれたのが読書会の学生だったからだ。

それ以上に私が刺激を受けたのは、作中の嫁姑関係に注目する解釈であった。学生いわく、「姑の松浦さんは嫁のあさひに対してすごく意地悪」なのである。たしかに、世間一般の嫁姑関係はうまくいくことが極めてまれだとは、男性でかつ未婚の私でもよく知っている。だが、「穴」を読んだことのある方ならお分かりだろうが、学生の出したこの結論はかなり意外な結論である。姑の松浦さんが好人物であるというのは、本文中で繰り返し述べられているし、彼女の振る舞いもそうした評価を裏切らないものである。

よめしゅうとめ、という言葉聞いて思わず笑いそうになった。嫁姑、という言葉から想起されるような類の感情を、私は姑に対して抱いたことがない。姑が素晴らしい完璧な女性だとは思わないが、欠点よりは美点を挙げる方が簡単なのは間違いない。性格が明るい、面倒見がいい、はっきりしている、勤勉である、等々。

(10)

さらに、姑の反対隣に住む世羅さんの奥さん（この人も「亡霊」なのだが、それを教えてくれたのも学生である）も姑のことを褒め称える(39)。

これらの記述を読んで、私は姑の松浦さんが「いい人」であると思い込んでしまった。というのは、私には、「きちんと働いている人は比較的常識がある」という偏見すらあるからである。そして、私はこの偏見をそれなりに説得力あるものにすることができるので、ここではそこまで踏み込

んでみたい。

そうするのに必要なのは精神分析理論である。「人間は生まれたときが一番変態で、大人になるにつれてまともになる」とはフロイト理論の骨子であるが、彼の後継者たらんとしたジャック・ラカンの「トポロジー」を少し応用してみよう。ここでの議論の文脈でいえば、労働をしていない人間は「想像界」の住民、(社会と折り合いをつけ)労働をしている人間は「象徴界」の住民になる。

「想像界」にいる人間は、社会的には未熟である。ラカンによると、母と子の二者関係がこれに当たる。子どもは、他者でありながら完全に他者とはいえない「母」とだけ向き合うので、いわゆる「コミュニケーション能力」を身につけることができない。ざっくりばらんな言い方をすれば、「親離れのできない子ども」、あるいは「子離れのできない親」というのが「想像界」の人間である。要するに、彼・彼女は「わがままな子ども」や「コミュニケーション能力に欠けた引きこもり」のイメージで捉えることができる。

それに対して、「象徴界」にいる人間は社会的に成熟している。この世界にいる主体は、母と「わたし・あなた」関係を築くだけでなく、第三項を導入している。ラカン理論では、この第三項は「言語」なのだが、ここでは「労働」を問題にしているので、「言語」の代わりに「お金」を第三項にしたい。人間は「言語」や「お金」といった「媒介(メディア)」による「分節化」を受けて初めて、この世界には「母」以外の人間もいることに気づく。そして、こうした媒介を操ったり、媒介に操られたりしながら他者とコミュニケーションをとり、「大人になっていく」のである。つまり、お金を稼ぐためには、自我を抑えて他人に頭を下げなくてはならない、他人に頭を下げられるということは常識があると言ってもいいのではないか、ということである。

ちなみに、私がラカン理論に熱中したのは、卒業論文執筆の準備をしていた学部四年生のときだった。<sup>3</sup> 普段、このような理論を使って論文を書く



ことはないので、ラカン理論に言及するのは本当に久しぶりなのだが、これは現実を切り分ける便利なモデルなので、私の「長期記憶」にきちんと保存されている。だからこそ、(きちんと働く)松浦さんは「理解ある姑」という稀有な存在だと錯覚したのであった。

前置きが長くなったが、この考察の最大のポイント「姑は悪人」説を検討していこう。盆も差し迫った頃、姑はあさひに「振り込み」の代行を依頼してくる。姑はその日が期限の振込用紙とお金を入れた封筒を自宅に置いたまま仕事に出てしまい、取りに帰る時間もないので、あさひにコンビニエンスストアまで行って、それを振り込んできてほしいのだという。もちろん、姑の口調は丁寧そのもので、お釣りが出たら、それでアイスを食べしてほしいとまで言っている。昼寝をするしか暇のつぶしようがないあさひは断る理由もないので、依頼を引き受ける。

だが、あさひはお金を振り込む段になって、用意されていたお金では24,000円足りないことに気づく。あわてて彼女はお店のATMからお金を引き出してその場を取めるが、現在無職の彼女にとって、24,000円は大金である。だから、あさひは「足りなかった分は立て替えておきました」と姑にメモを残すのだが、姑からは4,000円(とアイスバー二本)しか返ってこない。

おつりでアイスどころか大赤字だ。私の個人的な貯金はそんなに多くない。無職になったのだから貴重なお金だったのに、姑はどういうつもりだろう。よほど慌てていたのか。(中略)夜、姑が帰宅してから借家にやってきて、お金が足りなかったことを詫びながら私に四千円くれた。(中略)私はまるでわからないまま、しかし家賃がただなのだし、二万円くらいいいじゃないか、という文言を思いついたので、少しほっとしてアイスバーを冷凍庫にしまった。(42-43)

この引用にあるように、あさひは夫の両親が所有する別宅に家賃なしで住まわせてもらっている。そして、あさひと夫に「家賃は要らない」と言い出したのは姑である。姑はお金に困っておらず、ケチでもない。なので、このエピソードでのミスは「うっかりミス」なのだろうと私は判断し、姑の振る舞いの「不自然さ」を読み落としてしまったのだった。つまり、私もあさひと同じく、「二万円くらいいいじゃないか」と考えたのである。

しかし、学生の指摘を受けて考えてみると、たしかに何かがおかしい。そもそも、振込用紙とお金を入れた封筒の存在からして怪しい。自分で振り込むつもりならば、お金は財布に入れ、振込用紙だけを封筒に入れておけばよいただろう。それならば、出かけるときに振込の必要性を忘れていたとしても、自宅に残っているのは振込用紙だけである。この場合、家でゴロゴロしているあさひに頼むのは「振込代金の立て替え」である。振込の金額は74,000円と高額なので、さすがにあさひも立て替えた金額の返却を姑に要求してくるだろう。そうすると、姑が74,000円全額を払い、あさひの貯金は手つかずのままである。

そこで、姑は他の作戦を考える。74,000円のうち50,000円を自分で払い、残りの24,000円をあさひに払わせる。あさひはコミュニケーション能力に欠けるところがあるし、姑には家賃のことで大きな借りがあるから、きっとこのお金を請求してこないだろう。仮に請求してきたとしても、金額についてははっきり言わないだろうから、その場合はとぼけたふりをして4,000円だけ返せばいい。この作戦がうまくいくと、あさひの貯金は20,000円少なくなる。あさひは田舎に来るまで、それなりの生活費を負担してきたのだから、貯金はもともと少ないはずだ。そこから20,000円を出させれば、彼女の貯金はそろそろ底をつくことだろう。そして、姑の目論見通り、この作戦（新手の「振り込め詐欺」）はうまくいく。

たしかに、裕福な姑は「お金」一般には興味がない。ただし、息子の嫁あさひの貯金には興味を持っている。だから、彼女はあさひの貯金を狙い撃ちしてくるのだ。しかし、それはいったい何のために？ この謎を解く

カギを握っているのが松浦家から廃嫡された「タカちゃん」なる人物なのである。（あさひから見ると、タカちゃんは義兄である。）彼は松浦家のメインストリーム、特に実母とはあまりしっくりいっていなかったらしい。そして、彼はあさひにこのことを「これは一種の悲劇なんです」と説明する(59)。

この「タカちゃん」なる人物の思想については『英語英文学』で詳しく検討したので、ここでは繰り返さない。人は就学、就職のあと結婚して子を儲ける、そして子どもを養うために一層労働に精を出す、というのが世の中の「常識」である。松浦家のメインストリームもこうした大きな「流れ」を素直に受け入れていたが、タカちゃんにはそのことがしっくりといかなかったのだ。彼に言わせると、人はそういう「小さな幸せ」を手にするために本音を押し殺し無理をしている、ということなのだ。彼はとりわけ母（の松浦さん）にそういう欺瞞を見出し、松浦家から逃げ出してしまったようである。（おそらく、まだ学生だった頃に自殺をしたのだろう。）逆の言い方をすれば、タカちゃんが逃げるより他の選択肢を持ってなかったほどがちりと、「労働して金を稼ぎ、子どもを育て上げる」ことが松浦さんの強迫観念になっていたのである。

松浦さんはそういう人間なので、勤労意欲のないあさひに反感を覚えている。彼女の望みはあさひに松浦家の一員としての自覚を持ってもらうことだ。もちろん、その自覚とは「きちんと働く」ことである。その自覚を促すために、あさひの貯金を狙い撃ちしてくるのだ。貯金という「聖域」こそが、あさひの（物質面だけでなく）精神面での自由を担保している。だから、この聖域を攻め落とせば、あさひは自由を謳歌できなくなる。そうすれば、勤労意欲の低い彼女とて、自由を取り戻すために働きに出るだろう。そして実際に、姑の目論見通り、あさひは勤労を再開する。

これはあさひが松浦家の軍門に降ることを意味している。そして、あさひもそのことを自覚しているからこそ、物語は「家に帰り、試しに制服を着て鏡の前に立って見ると、私の顔は既にどこか姑に似ていた」という文

言で幕を閉じるのだ(97)。

自分が労働の価値を重んじているからといって、息子の嫁にも働くことを遠回しに求めてくる姑。「穴」という小説は、専業主婦が普通だった世代に属する姑が男女共同参画社会に生きる嫁に「労働」の効用を説く点で特異なのだが、いくら社会・政治・経済的に正しいことであっても、それを望まない嫁にまで陰湿なやり方で押し付けてくる姑というのは、学生が指摘するように、「嫌な奴」だと評価せざるをえない。

このような新たな観点から作品を読み直すと、たしかに、松浦さんの嫌なところは枚挙に暇がない。一つ例を挙げると、物語の冒頭で、あさひの夫と姑が携帯電話で会話をしている場面である。

「え？ あさちゃん辞めちゃうの」姑が少し声を小さくした。それでも声は筒抜けに聞こえた。「そりゃ、引っ越したらあさひだって通勤できないよ」「それもそっかあ。何ならあんただけ単身赴任してくれば？ 辞めるの、気の毒じゃない」(中略)夫は黙ってうなずき「そんなわけにいかないだろう、別々に住むなんて」と答えた。姑は「まだ若いもんね」と言って少し笑い声を立てた。

(9)

松浦さんの発言は、現代の社会に参画する人間のレベルでは自然なことだが、家族や夫婦といったプライベートのレベルではやや不自然である。「息子だけ単身赴任すればいい」という発言をうがって解釈すれば、無職のあさひが自分の隣に住むのは最悪の事態である、そんな怠け者の人間を松浦家に置きたくない、ということである。また、「まだ若いもんね」という言葉にも大きな含みがある。あさひはまだ若いから、ここでいったん退職してキャリアが途絶えても、すぐに再就職して事なきを得るだろうと姑は言いたかったのだろうか。

実際、あさひが隣に引っ越してくると、無職になった彼女の存在を姑は

軽く見ている。働き者の姑は、息子夫婦の引っ越しに対しても準備万端で、掃除やら家具の配置やら全ての雑務を自分一人でやってしまう。嫁のあさひに対する配慮も（表向きは）細やかで、引っ越し作業に居合わせることで彼女の足が汚れないようにと、わざわざ新品のスリッパまで用意してあるのだ。ただ、注目すべきは、このスリッパという細部に姑の深層心理が見え隠れしていることである。（カルロ・ギンズブルグ風に言うと、「細部に神は宿る」ということなのだろうか。）

姑が用意していたスリッパは犬の顔が刺繍してある妙に立体的なもので、足の裏がふかふかした。新品に見えた。まさかわざわざ買ったのだろうか。引っ越しが終わったら、この珍妙なスリッパを姑はちゃんと持って帰ってくれるのだろうか。「あさちゃん！ちょっと来てみて！」姑の声がした。私はピンクの舌をべろりと出したその犬をぱたぱた鳴らしながら走って台所に行った。垂れた耳のところがひらひら動く仕様になっているのだ。(21-22)

あさひはこのスリッパを気に入っていない。気に入るはずがない。姑は普通のスリッパを買うこともできたはずなのに、わざわざこんな「子どもだまし」な代物を買ってきたのだ。それだけに、このスリッパには姑のメッセージが込められている。そのメッセージとは、無職のあさひは一人前の「大人」ではなく、まだまだ未熟な「子ども」です、年齢相応の扱いを受けなければ外に出て働きなさい、というものである。

姑は本人が有能なだけに、実に陰湿なやり方で専業主婦を攻撃してくる悪者である。だが、私はどうしてもこの「松浦さん」が嫌いなれない。なぜなら、松浦さんがそうまでこだわる「労働」とは、彼女の苦闘の歴史でもあるからだ。彼女もあさひと同じく、松浦家へと嫁いできた「よそ者」である。ただし、同じ「嫁」の立場だといっても、松浦さんのほうがあさひよりもずっときつい思いをしてきたにちがいない。彼女が嫁いできた時

代の日本の田舎には、「封建制」といいほどの古いしきたりががちりと存在していた。だから、松浦さんは（男性である私には理解できないほど）理不尽な嫁姑関係に悩まされ、そうしたしがらみから一時的に逃避する手段として、外に出て働くことを選んだのではないだろうか。

義祖父の時代の松浦家がどんな家庭であったのかは作品ではあまり詳しく触れられていないが、義祖父自体が非常に厳格な人だった上に、反「松浦さん」派の巨頭タカちゃんまでもが自分の母と祖母の関係が大変なものだったとほのめかしている(78-79)。そのことに関して、一つだけ具体的なエピソードをタカちゃんは提示する。

これはドクダミです。バアさんがよくこれでお茶を作ってたっけ。その匂いをおふくろが嫌がってね……僕あオバアちゃん子だったもんだから好きだったけど、おふくろは絶対に飲まなかったし僕が飲むのも嫌がったね。それでこんなに生え放題だ。お嫁さん、よければ摘んでお茶をこしらえてください。(61)

ひょっとして、「何もドクダミの匂いぐらいで大騒ぎしなくても」と感じる人がいるかもしれないが、こういう細部が積み重なって「全体(姑嫌い)」が出来上がるのである。

結局のところ、こういう苦境を余儀なくされた松浦さんにとって、「労働」は「ささやかだけれど、役に立つこと」なのである。そして、彼女が仕事にのめり込むことで、タカちゃんの反抗という「悲劇」が訪れるのだが、この悲しみを紛らわせるために彼女はさらに仕事に打ち込むようになったのだろう。レイモンド・カーヴァーの短編小説「ささやかだけれど、役に立つこと(“A Small, Good Thing”)」よろしく、息子を失った悲しみを和らげるために、松浦さんは(「焼き立てのパン」ではなく)労働の果実を口にするのだ。そして、彼女からその「癒しの種」を奪う権利はどこのだれにもないのだろう。

### III. おわりに

「穴」の語り手松浦あさひは作品の冒頭で「よめしゅうとめ」問題を一笑に付すが、彼女の言葉とは裏腹に、「穴」の背後には嫁姑問題がべっとりと貼り付いている。ここから、語り手あさひはうそをついている、彼女は「信頼できない語り手」だと主張する向きもあろうが、私がこのタイプの解釈を支持することは絶対にはない。文学研究者である以前に小説好きである私にとって、小説の語り手を信頼しなければ、その小説を最後まで読むべき理由がなくなってしまうからだ。小説を読むこととは、読者と語り手・作者の間に信頼関係があるからこそ成り立つものなのだ、と私は考えているのである。

この論文の冒頭で、私はド・マンを引用しながら、すぐれた批評家が彼女の属する文学的、あるいは社会的文脈に対して客観的な視点を持ちえないことを確認した。このことは「穴」のあさひにも当てはまる。一見したところ、「姑が素晴らしい完璧な女性だとは思わないが、欠点よりは美点を挙げる方が簡単なのは間違いない」と述べるあさひは姑の松浦さんを客観的に見ているようだが、実際には、彼女は姑を客観的には見ていない。そして、言うまでもなく、この小説の面白さはこの点、「語り手のあさひが姑を客観的に見ていそうで見ていない」という微妙さに存在する。客観と主観を隔てる微妙な境界線。そこを綱渡りする瞬間に生じるのが「文学」なのである。

客観と主観を隔てる境界線のあいまいさ。このことを強く意識しているからこそ、私はここで（通常の論文には書かないような）個人的なことまで述べてみたのである。最後に、この論考を書く際によりどころとなった主観を二つ付け加えておく。

一つはこの部分を書き、論考を完成させたのが2014年5月11日の「母の日」だということである。嫁姑問題において、夫・息子である男性の立場はなかなか難しい。（「穴」においても、夫の宗明や舅はほぼ完全にフェードアウトしている。）理屈からすれば、血の繋がりのない嫁の肩を持つべ

きなのであるが、そうすると、祖母との嫁姑関係で苦しんできた実母を見捨てることになる。それまで苦しんできた母をばっさり切って捨てられる男性は賢く、社会での出世も間違いない優良株なのだろうが、私はそういう人間を好きにはなれない。このように、理屈や理論は今日の前で苦しんでいる人間を見殺しにするものなので、最終的に私は「反理論」の立場をとるのだが、だからといって、理論を責めるのはお門違いである。なぜなら、理論とはそもそもそのようなものだからである。

この「苦勞をともしてきた母をどう扱うのか」という問題は、実はすぐれて文学的である。特に、「ぼろから富へ」という階級上昇の機会均等を高らかに謳い上げるアメリカの文学において、「母」をとるか「出世」をとるかの二者択一は大きなテーマである。私は現在、チャールズ・チェスナットというアフリカ系アメリカ人作家の研究を進めているが、彼の長編小説 *The House Behind the Cedars* (1900) はまさにこのテーマを扱っている。さらに、現代でも、私の愛読する作家フィリップ・ロスは *The Human Stain* (2000) で、このテーマをプロットに組み込んでいる。

そして、付け足すべき主観の二つ目は、この「アメリカ文学」に関連している。アメリカ文学を日本の大学の講座に置き換えると「英米文学」になるが、この固有名詞はあいまいでやっかいである。(教養を軽視する) 日本社会において、「英米語」はビジネスと強く結び付く一方で、「文学」は「物好きの暇つぶし」を暗に意味する。両者は正反対のコノテーションを持つので、「英米文学」は完全な「オクシモロン」である。文学好きの私としては、アクセントは「文学」のほうにあると声高に主張したいところなのだが、今のところ、「飯の種」になってくれているのは圧倒的に「英米語」のほうである。このことを考慮すると、「英米語」を冷たくあしらうことはできない。そういう意味で、私は高校の英語の教科書にあった例文「彼はいわゆる『歩く矛盾 (walking contradiction)』だ」を地で行く存在であり、そういう中途半端な自分を弁護するためにこの文章を書いた、というのが正直なところである。



## 【注】

- 1 私はかつて、大学でお世話になった先生から、「あなたは典型的なりベラル・ヒューマニストだ」と評されたことがある。ところで、ヒューマニストの典型といえば、ドイツ観念論の巨匠イマヌエル・カントだが、彼に言わせると、人間には必ず理性が備わっているのである。だから、ある人が理性的に振る舞えるかどうかは、彼・彼女がそうする勇気を出せるかどうかにかかっているのだ。このように、ヒューマニストはあらゆる問題を勇気のあるなしに帰着させる傾向がある。
- 2 そうした含みを持つために、この雑文のタイトルを英訳する際、私はイラン系アメリカ人女性解放運動家アーザル・ナフィーシーの *Reading Lolita in Tehran* (2003) をもじって、“Reading Hiroko Oyamada’s ‘Ana’ in Koshigaya” とした。
- 3 あまり理論を好まない私が精神分析に熱中したのにも個人的な理由がある。フロイトはベビーベッドから「糸巻き」を投げて遊んでいる子どもを見て、こう結論づけた。子どもは糸巻きを投げたときには「いない」と言うが、糸をたぐって糸巻きを回収したときには「いる」と言う。この状況において、糸巻きは母親の象徴であり、彼は母親との別離の悲しみを宥めるために、そのような遊びをするのである、と。そして、フロイトの解釈は私の人生の最初の記憶を完全に説明するものだったのだ。二才半のとき、私は肺炎をこじらせ、長期入院をしていた。そのとき、私は他の入院患者が持ってきた「人形」を借りてきてほしいとよく母にせがんだ。しかし、母がその人形を借りてきて枕元に置いてくれると、私はすぐにそれをつかんでベッドの外に放り投げた。そうすることで、「おれは十分に強い男だ。母親の愛情もそんな人形もおれには必要ない」と主張したかったのだ。もちろん、私の本心はそれとは正反対だったはずである。そのころ、妹が生まれたために、私は母を独占することができなくなった。母いわく、私はそのことで母を困らせることはなかったとのことだが、当の私はその入院が妹から母を一時的に取り返す企みだったと考えている。

## 【引用文献】

- Man, Paul de. *Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism, Second Edition, Revised*. Minneapolis: U of Minnesota, 1983. Print.
- Said, Edward W. *Representations of the Intellectual: The 1993 Reith Lectures*. 1994. New York: Vintage, 1996. Print.
- 小山田浩子. 『穴』. 東京：新潮社, 2014.
- 森本奈理. 「『文学と宗教』補講：小山田浩子、『穴』を読む」. 『英語英文学（文教大学英語英文学会）』41号（2014）, 26-38.

